

神戸女学院「由起しげ子文庫」資料紹介  
「女性の文化と女流の文学」座談会

(折口信夫・平林たい子・由起しげ子 司会：臼田甚五郎)

藏 中 さ や か<sup>\*1</sup> 碓 井 美 沙 季<sup>\*2</sup>

Publication of the Document from Kobe College “YUKI Shigeko Collection”

Catalog Number ‘Other Items #27’: “Round-Table Talk About Woman’s Culture and Novels”

KURANAKA Sayaka<sup>\*1</sup> USUI Misaki<sup>\*2</sup>

---

\*1 神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 教授

\*2 神戸女学院大学大学院 文学研究科 比較文化学専攻 博士前期課程修了

連絡先：藏中さやか 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科  
kuranaka@mail.kobe-c.ac.jp

## 要　旨

本稿は神戸女学院大学図書館が管理する「由起しげ子文庫」資料番号【その他27】「女性の文化と女流の文学」座談会を活字化して公にするものである。

当該資料は、縦書き原稿用紙（19.5 cm × 13.5 cm、「悠久原稿用紙」二〇〇字詰）二〇九枚（右上端部仮綴じ）に、本行鉛筆書きで一行おきに記される。表紙記載事項より、雑誌『本流』第二号掲載のために開催された折口信夫、平林たい子、由起しげ子による座談会（司会は臼田甚五郎）の筆録であることがわかり、その開催は、記される発言より由起が芥川賞を受賞した翌年の1951年4月26日のことと考えられる。速記記録を原稿化し完成原稿とすべく対談者間で回覧中であったが、鉛筆および黒ペンによる補入、加筆等の状況から、臼田、平林がそれぞれ加筆訂正を行い由起の手元に届けられた段階で作業が中断したものと推察される。折口、平林の未発表原稿として、資料的価値が認められるが、未定稿であることから全体に緊密さを欠き、首尾一貫しない発言や当該資料内には記されない人名や事柄を受けた発言も含まれる。

なお、『本流』は1950年2月に創刊号が刊行された「折口信夫責任編集」の雑誌である。國學院大學折口信夫博士記念古代研究所によれば、休刊していた『國學院雑誌』の代替えの位置づけで刊行されたもので、第二号以降は未刊とのことである。

**キーワード：**由起しげ子、折口信夫、平林たい子、臼田甚五郎、『本流』

## Abstract

This is the typescript for the original manuscript of “Round-table talk about woman’s culture and novels”. It belongs to YUKI Shigeko Collection, Kobe College, catalogue number ‘other items #27’. The round-table talk is thought to have been held on April 26, 1951, presided by USUDA Jingoro. ORIGUCHI Shinobu, HIRABAYASHI Taiko and YUKI Shigeko took part in this talk. It was planned for publication for the magazine *Honyuu*, No. 2, though it was not published.

**Keywords:** YUKI Shigeko, ORIGUCHI Shinobu, HIRABAYASHI Taiko, USUDA Jingoro, *Honyuu*

## 「女性の文化と女流の文学」座談会（折口信夫・平林たい子・由起しげ子）

司会：白田甚五郎

藏中さやか  
碓井美沙季

### はじめに

本稿は本学図書館が管理する「由起しげ子文庫」資料番号【その他<sup>27</sup>】  
「女性の文化と女流の文学」座談会」を活字化して公にするものである。

当該資料は、縦書き原稿用紙（19・5 cm × 13・5 cm、「悠久原稿用紙」  
二〇〇字詰）二〇九枚（右上端部仮綴じ）に、本行鉛筆書きで一行おき  
に記される。表紙記載事項より、雑誌『本流』第二号掲載のために開催  
された折口信夫、平林たい子、由起しげ子による座談会（司会は白田甚  
五郎）の筆録であることがわかり、その開催は、記される発言より由起  
が芥川賞を受賞した翌年の一九五〇年四月二六日のことと考えられる。

『本流』は一九五〇年二月に創刊号が刊行された「折口信夫責任編集」  
の雑誌である。國學院大學折口信夫博士記念古代研究所によれば、休刊  
していた『國學院雑誌』の代替えの位置づけで刊行されたもので、第二  
号以降は未刊とのことである。

当該資料は、速記録を原稿化したもので、完成原稿とすべく対談者

間で回覧中であつたと推察される。鉛筆および黒ペンによる補入、加筆  
等の状況から、白田、平林がそれぞれ加筆訂正を行い、由起の手元に届  
けられた段階で作業が中断したものと考えられる。折口、平林の未発表  
原稿として、資料的価値が認められるが、未定稿であることから全体に  
緊密さを欠き、首尾一貫しない発言や当該資料内には記されない人名や  
事柄を受けた発言も含まれる。なお、由起の発言の一部は、藏中さやか  
「作家由起しげ子の輪郭」（『女性学評論』第三一号 二〇一七・三）で  
紹介した。

**【付記】** 本稿は二〇一六年度神戸女学院大学学研究所の総合研究助成によ  
る研究成果の一部として、平林たい子、由起しげ子両氏の著作権継承者  
および学校法人神戸女学院の許可を得て公表するものである。雑誌『本  
流』については、本学図書館より國學院大學折口信夫博士記念古代研究  
所に照会をおこない、小川直之先生より「教示を得た。記して御礼申し  
上げる。」

凡例

- 一 字体は、適宜、通行の字体に改め、発話者名は太字で記した。
- 一 改行位置は、適宜、改めた。改ページ位置は『』で記し、（　）でページ数を右傍に算用数字で記した。
- 一 本行および右傍の「？」は全て鉛筆で、塗抹や書き込みは黒ペンで記されているが、これらの筆記具については特に注記しない。
- 一 原表記が確認できる取り消し線、見せ消ち、塗抹は二重取り消し線で示し、鉛筆による塗抹は、塗抹字数と同数の■で示した。傍記、書き込み等は可能な限り忠実に記入した。
- 一 鉛筆による、補入および加筆、訂正は〈　〉で本行中に記した。
- 一 黒ペンによる補入は、《　》で記した。原表記を塗抹して訂正した部分が長く、右傍に記入できない場合も、《　》で本行中に記した。
- 一 原表記の上から黒ペンで訂正を重ね書きしている文字および原表記の文字に一部加筆した文字は、本行に二重取り消し線を引かず、右傍に《　》で訂正後の字を記した。
- 一 原表記の上から黒ペンで字体明記のための重ね書きをしている文字は、太字で記した。
- 一 判読不明箇所は、不明字数と同数の□で示した。
- 一 特に原表記に不審のある場合のみ、右傍に（ママ）と記した。
- 一 空白がある箇所は、空白字数等を〔　〕で記した。
- 一 例外的な事項は、適宜、漢数字で注番号を付し、注記した。
- 一 指示線や傍書中の書き損じ、訂正塗抹箇所は一部割愛した。

表紙

四月二十六日  
本流 第二号

「女性の文化と女流の文学」座談会

出席者  
（文学博士 折口信夫先生  
平林たい子先生  
小説家 由起しげ子先生  
（司会者）由田喜五郎氏 『  
（司会者）由田喜五郎氏 』

本文

由田

それでは由田の座談会の進行を述べさせていただきます。おトロモ御

『由田は編輯部とする事。』

『司会者』由田喜五郎氏 』

拙稿を申上げておきます。本流の第二号は、「女性の文化と女流の文学」  
を主題にいたしまして、編輯する予定なんですが、本日  
は、平林<sup>(1)</sup>さんと由起さんのお見えを頂きまして、それらの諸般の問題をいろいろお伺いすることになると思うのであります。折口先生は  
御存知のように、日本の女性の問題と、それから女流文学の運命といふものについて、非常に<sup>(2)</sup>深い洞察をお下しになつておられまして、そうして又從来何人もその及ばなかつた面について、女性の将来といふものについての御考察を仰がれまして、お見え頂かせておるのです。  
本來、その折口先生を中心いたし<sup>(3)</sup>まして、当代の十数女流文学の将来を形成するお二人様と、そういう現代の問題について懇談して頂きたい  
一 「本日は」を丸で囲み、本文二行目「女性の文化と女流の文学」の前に移動する指示線あり。

言われておりましたわけで、再び我々の上に<sup>(4)</sup>も文芸復興が来たときに、女性の方によつてそういう日本を作つて頂きたいと。特に今の日本における差し迫つた運命の中では、女性の力によつて永遠の平和といふものがもたらし得る何ものかを含んでおるのではないかと<sup>(5)</sup>、いうことさえも私は考へてゐるわけなんでございまして、さつとばらんにいろ／＼の問題を論じて頂きたいと思うのでござります。で女流の文学といふものが、現代の日本の文学者の中でも、明治には樋口一葉、與謝野晶子<sup>(6)</sup>さん、それからこの間の戦争最中に岡本かの子さんがお出になつて、確かに日本の文学の内容を豊富くに<sup>(7)</sup>して下さいましたのですが、今後の日本の文学の運命を築き上げて行く上において、平林さんはどういふうな方面で、ど<sup>(8)</sup>ういう意図でもつてこの女流の文芸復興をもたらして下さるような役割を果して頂けるものか、一つお伺いしたいと思うのでございますが…………。「一行空白」<sup>(9)</sup>

**平林** どうもそういう抱負がないのでござります。(笑声) 「一字空白」<sup>(10)</sup> 実際ちつとも意識しないで、非常に本能的に小説を書いておりまして、女、男ということも意識していないのでござります。だからそう改まつておつしやられると<sup>(11)</sup>、何にも申上げることがないので、本当に恥しいのでござります。『』<sup>(12)</sup>されども、なほと云ふべきお辭に本のやうなものが書かれて……。

**白田** まあ戦後に随分もり／＼と言つてもよい程にいろ／＼お書きなりまして、その中<sup>(13)</sup>の一つの流れの中には、非常に人間の本的な欲求と

二  
――「人間の」を丸で囲み、「非常に」の前に移動する指示線あり。

申しますか、本能という『と』ちょっとと『違つた感じになりますが』  
根元的<sup>源</sup>的な<sup>生</sup>使命の求めるところです。そういう<sup>原</sup>荒本的な欲求、そういうものを持つてゐる人間というものを何かお書きなされたように拝見<sup>(1)</sup>しておるのでござりますけれども、或いはあの「地底の歌」や、或いは<sup>(2)</sup>終りに立<sup>(3)</sup>や証木<sup>(4)</sup>や<sup>(5)</sup>おまかせね<sup>(6)</sup>や<sup>(7)</sup>を拝見いたします」というと、曾ていわゆるプロ文学の□□□□として出て来たことと並んで見ますと<sup>(12)</sup>、うと、そういうものを基礎として実際の人間というものの象形を始めておられるように思われるでござりますけれども、何か特にそういう思うところがあつて、ああいうお仕事をなさつておるのでございましょうか。<sup>(13)</sup>

品として》自分を投げ出すときには、  
三 本行は英単語のカタカナ書きか。「チャムビオン」は黒ペンによる上書き。  
さらに右傍に鉛筆で「英語」と記載。 その一皮下にある私の心の膚が出て来ますので、全く思想的な詠及としてやがれ。

**白田** まあ戦後に随分もり／＼と言つてもよい程にいろ／＼お書きなりまして、その中<sup>(10)</sup>の一つの流れの中には、非常に人間の<sup>二原</sup>光本的な欲求と

「人間の」を丸で囲み、「非常」の前で移動する旨下線あり。

さらに右傍に鉛筆で「英語」と記載。

本邦は英単語のカタカナ書きか。「チャラム・オン」は黒ペンによる上書き。

何々の主義とか思想とかいふ割り切れたものがない混頓<sup>(けんとん)</sup>な、非常に文化的本<sup>(ほん)</sup>のやうな小説<sup>(こせつ)</sup>。」そういうより外でござります。

非常に文化的本<sup>(ほん)</sup>のやうな小説<sup>(こせつ)</sup>。

ないのでござります。

それは私が今申上げた元<sup>(げん)</sup>本<sup>(ほん)</sup>的<sup>(てき)</sup>な欲求<sup>(よくしゅう)</sup><sup>(17)</sup>というものに、やはり繋つ

てゐるよう思ひますけれども、それで由起さんは、又昨年芥川賞をおとりになつた「本の話」以来でござりますか。その小説のお出しになりましたのは……。<sup>(18)</sup>

由起

その前に「脱走」<sup>(だつそう)</sup>というのを書いたのでござりますけれども、とにかく書き始めの動機なんですが、全然小説を書く氣なんかなかつたのでござりますけれども、八木岡さんが小説というものを書いてごらんなさいと言わ<sup>(19)</sup>れたから、小説というものはどんなものかと申上げたら、小学校の綴方を書くように書けばよろしいというものですから、私綴方の積りで書いておつたのであります。だから私の小説といつたら、私も不思議な気がしておる<sup>(20)</sup>くらいだつたのですけれども、いつまでもいつまでもそんなことを言つてたらおかしいと思つたから、今ではそんなことを言わないようにしております。それでも、去年から今年までの間には、随分そういう意識が深まつて<sup>(21)</sup>参りましたわけで、その気がなかつたと思うというような、そういう整理をして、翻訳いたしておるような気持から、やはりはつきり書くものなら書きますという、そういう気持になつて参りました。<sup>(22)</sup>

白田 それと今長編<sup>(じょうべん)</sup>に出をお出しになつていらつしやいますね。長編をお書きになるには、やはり今のお話のはつきりした意識ですね。それは

どういう点を狙つておられるのでしょうか。一つ今後の長編の発展と共に、そ<sup>(23)</sup>の意識が尚ほつきりするのでございましょうかを大体お伺いさ

せて頂けると……。

由起 狂うということは、私は大体いろいろなことが入つて書いている

のではなくして、これに得て生きるということも含めて探して<sup>(24)</sup>いるような状態でござりますから、それは長編を書きたいというようなことは、正確に考えてやつたことではなくして、もつと急いでできればそれに越した「一字空白」<sup>(25)</sup>ことはないのですから、それに切れないのでしょう。だからやはり長編で書いておいた方がよいと思って、途中で行き詰つたらしようがありませんけれども、そういうものを書き上げたいと思つておりました。<sup>(26)</sup>

白田 それでは一つ折口先生。日本の文学書の中で、女流作家と申しますが、そういうふうな専門の小説が意識を持つて、女性が出て来たとい

うのは古くからなんでございましょうか。新らしいことなんでございましょう<sup>(27)</sup>か。で先程ちょっと出ました、平安朝時代の女性でござりますね。ああいう人達が物語を書いている意図<sup>(28)</sup>といふものは、どんな風だったのですか。

折口 別に我々が小説家というような気持<sup>(28)</sup>ではないでしょうね。歴史

を書くのと同じ積りで、歴史の幾らか上のものは、小説ならば大衆小説というような態度でしようね。歴史を書く積りだけれども、或る人の名前を隠しておくとか、或<sup>(29)</sup>いはいろいろなモデルというような意識ではなく、いろいろな事件を集めて来て、ごつちやにして一つのことにして書くとかというふうにして書いているのをしようね。だから小説意識というものが、書いているところとは<sup>(30)</sup>変つ

ているでしょ。従来大体日本では小説意識といつもののが樋口一葉当たりも同じだと思う。一葉なんか恐らくお金があつたら、幸福な結婚して小説なんか書かなかつたでしょ。お金がなかつたから一葉は書いたので『<sup>(31)</sup>こんなことを言つたら、一葉びいきな人に叱られるかも知れないが、あれより先には行はないと。あの文体を自由に現わしてみたいという欲望の方が主ではないかと思う。西鶴見たいな、ああいう文体を考へない先輩』<sup>(32)</sup>から受取つたのだろうけれども、大部違います。あの文体を現わそうという欲望で書いたのだろうと思うから、そういうことは、やはり大して本当に小説意識ではないと思う。小説意識がある、ないということは、平林さん<sup>(33)</sup>のお話になつた通りで、小説書くこともその人の才能の問題もあるし、小説なんというものは、自分はよく書いていると思って、不立派なものができることがあるでしょ。紫式部なんというのは、歴史書く積り』<sup>(34)</sup>でいるから割合に正確に書いている。自分の知つてゐる歴史だとか、実際の人だとがなかつたら、あれだけ正確に書けなかつたと思ひます。だから小説書く積りで、歴史を書く積りで書いているから、だからあれだけでき』<sup>(35)</sup>たと思います。併し、書きたい、作りたいという欲望を起すときになつて、初めて小説意識が出て来ると思います。朝顔日記を書いた当時の、むしろあれぐらいから、本当に小説ができる來るのじやないかしら。モデル家自』<sup>(36)</sup>体が殖えているのに、その時代の古い言葉で書こうとした点で失敗したんだけれども、江戸の浅草以前というよくな、あれだけの本当の小説が意識を持つてゐるだろうと思う。併し、一葉までは小説意識を持つて書かなかつ』<sup>(37)</sup>たからしょがないといふ人もあつたから、小説じやないかと思

う。例えば「竹くらべ」というよなものは小説ではないと思う。「別れ道」見たいのは本当に小説になつて来るのだけれども、本当にちよつと小説の筋があるだけで』<sup>(38)</sup>、やはり一葉的な文章を書いてゐる。だから何といつても小説の意識あるなしに拘わらずできたものが小説であるといふことの方が意味があるのだと思います。

**白田** 平林さんが今お書き初めになつてい』<sup>(39)</sup>る宮中物と申しますか、今のところ昭憲皇太后に手をつけていらつしやるようでござりますけれども、今まで「地底の歌」のような、ああいうような封建的な社会の人間を追及して來た。その中の型に対しても、型の都合とか、そ』<sup>(40)</sup>ういう何か関連があつて出て來たのですか。どういうところからなのでございましょうか。

**平林** いえそういうわけではないのでござります。非常に常識的な動機で書き出したの』<sup>(41)</sup>でございます。それは「昭憲皇太后」の中の昭憲皇太后が実際の真相とは少し違つてゐるのでござります。『○』沖縄でも、実際の事実は、英照皇太后と二人で馬車に乗つて、お掘に落ちたのでございませんけれども、馬車といふものに馴れないのでござります。そこをいますけれども、御者<sup>(42)</sup>が、馬車といふものに馴れないのでござります。そこを助けた方が罰せられたといふことを聞いて、ちょっと面白い『ヒューマニズム』問題だと思つたのでござります。ただ七枚ぐらいのコントで、格別にいろいろ含めて書く積りはなかつたので』<sup>(43)</sup>ござりますけれども、書くうちにああいうふうに長くなつてしまつたので、本当にそやひや宮中といふや本もやは、私は全然存じませんし、そういうわけじやないのでござります。ホホホに外国人が日本の皇室のことを書』<sup>(44)</sup>いた所思ひや。《それも手に入つたものはわづかにで

「ございまして、》<sup>それ以外別に</sup> 東用意してそれがや書いたのでございま 「一字空白」<sup>四</sup>  
〈せん〉から、別にモヤマヤわけではなづのやうやうやく、モヤマヤ  
モヤマヤ御覽になると《わかるとほり史実としても》非常に不完全なものでござります。

田田 そういう動機でお書きになつて、今<sup>(45)</sup>後と雖もああいう方面の小説もお書きになるわけですか。事実以外のものも相当あるわけでござりますが、そうしたわけでお書き進めになる御予定ではございませんか。

平林 「昭憲皇太后」が少しのらすから、それを書いたら終りでござります。やはり私はああいうものを書く人本れじやないのでござります。樋口一葉の話が出ましたけれども、樋口一葉の小説本れか、「別れ道」に出て来るような階級かや書いた本や<sup>(47)</sup>は、いわゆるプロレタリヤではありませんけれども、《層から言つたら私は》あそこに出で来るような女なんでござります。《》されども、私從来もそやがますけれども、私《の》今まで吸収して來た環境、影響といふものもそういうものでござります。」即ち、《私はあ、いふ階層の現代での》生きて行く道といふものを書いて行こうと思うのでござります。これが私としても一番いやがむるものと思ひます。

田田 それは同時に、日本の生きる道といふのを、そこに明るみにして行こうとい<sup>(48)</sup>う御意図でいらっしゃるのですか。

平林 そういうわけではありませんけれども、《私がかけば、》「別れ道」大それた書<sup>(49)</sup>本の女《でもある小説とは》と違う。本の女を書こうと《は》思はないのです。同じ階層な女でござりますけれども、生活の感情准連<sup>(50)</sup>思ひます。

四 空白箇所、「す」を消した痕跡あり。

水野仙子<sup>(51)</sup>が素本「一字空白」<sup>(52)</sup>をかねやせはなゆのやうに  
小まきれども、短命<sup>(53)</sup>とまよせ、若く死<sup>(54)</sup>とまよせ。水  
野仙子<sup>(55)</sup>が、人を相當才能のあつた人だと思<sup>(56)</sup>まよせ。死<sup>(57)</sup>や  
死<sup>(58)</sup>や<sup>(59)</sup>や<sup>(60)</sup>や<sup>(61)</sup>や<sup>(62)</sup>や<sup>(63)</sup>や<sup>(64)</sup>や<sup>(65)</sup>や<sup>(66)</sup>や<sup>(67)</sup>や<sup>(68)</sup>や<sup>(69)</sup>や<sup>(70)</sup>や<sup>(71)</sup>や<sup>(72)</sup>や<sup>(73)</sup>や<sup>(74)</sup>や<sup>(75)</sup>や<sup>(76)</sup>や<sup>(77)</sup>や<sup>(78)</sup>や<sup>(79)</sup>や<sup>(80)</sup>や<sup>(81)</sup>や<sup>(82)</sup>や<sup>(83)</sup>や<sup>(84)</sup>や<sup>(85)</sup>や<sup>(86)</sup>や<sup>(87)</sup>や<sup>(88)</sup>や<sup>(89)</sup>や<sup>(90)</sup>や<sup>(91)</sup>や<sup>(92)</sup>や<sup>(93)</sup>や<sup>(94)</sup>や<sup>(95)</sup>や<sup>(96)</sup>や<sup>(97)</sup>や<sup>(98)</sup>や<sup>(99)</sup>や<sup>(100)</sup>や<sup>(101)</sup>や<sup>(102)</sup>や<sup>(103)</sup>や<sup>(104)</sup>や<sup>(105)</sup>や<sup>(106)</sup>や<sup>(107)</sup>や<sup>(108)</sup>や<sup>(109)</sup>や<sup>(110)</sup>や<sup>(111)</sup>や<sup>(112)</sup>や<sup>(113)</sup>や<sup>(114)</sup>や<sup>(115)</sup>や<sup>(116)</sup>や<sup>(117)</sup>や<sup>(118)</sup>や<sup>(119)</sup>や<sup>(120)</sup>や<sup>(121)</sup>や<sup>(122)</sup>や<sup>(123)</sup>や<sup>(124)</sup>や<sup>(125)</sup>や<sup>(126)</sup>や<sup>(127)</sup>や<sup>(128)</sup>や<sup>(129)</sup>や<sup>(130)</sup>や<sup>(131)</sup>や<sup>(132)</sup>や<sup>(133)</sup>や<sup>(134)</sup>や<sup>(135)</sup>や<sup>(136)</sup>や<sup>(137)</sup>や<sup>(138)</sup>や<sup>(139)</sup>や<sup>(140)</sup>や<sup>(141)</sup>や<sup>(142)</sup>や<sup>(143)</sup>や<sup>(144)</sup>や<sup>(145)</sup>や<sup>(146)</sup>や<sup>(147)</sup>や<sup>(148)</sup>や<sup>(149)</sup>や<sup>(150)</sup>や<sup>(151)</sup>や<sup>(152)</sup>や<sup>(153)</sup>や<sup>(154)</sup>や<sup>(155)</sup>や<sup>(156)</sup>や<sup>(157)</sup>や<sup>(158)</sup>や<sup>(159)</sup>や<sup>(160)</sup>や<sup>(161)</sup>や<sup>(162)</sup>や<sup>(163)</sup>や<sup>(164)</sup>や<sup>(165)</sup>や<sup>(166)</sup>や<sup>(167)</sup>や<sup>(168)</sup>や<sup>(169)</sup>や<sup>(170)</sup>や<sup>(171)</sup>や<sup>(172)</sup>や<sup>(173)</sup>や<sup>(174)</sup>や<sup>(175)</sup>や<sup>(176)</sup>や<sup>(177)</sup>や<sup>(178)</sup>や<sup>(179)</sup>や<sup>(180)</sup>や<sup>(181)</sup>や<sup>(182)</sup>や<sup>(183)</sup>や<sup>(184)</sup>や<sup>(185)</sup>や<sup>(186)</sup>や<sup>(187)</sup>や<sup>(188)</sup>や<sup>(189)</sup>や<sup>(190)</sup>や<sup>(191)</sup>や<sup>(192)</sup>や<sup>(193)</sup>や<sup>(194)</sup>や<sup>(195)</sup>や<sup>(196)</sup>や<sup>(197)</sup>や<sup>(198)</sup>や<sup>(199)</sup>や<sup>(200)</sup>や<sup>(201)</sup>や<sup>(202)</sup>や<sup>(203)</sup>や<sup>(204)</sup>や<sup>(205)</sup>や<sup>(206)</sup>や<sup>(207)</sup>や<sup>(208)</sup>や<sup>(209)</sup>や<sup>(210)</sup>や<sup>(211)</sup>や<sup>(212)</sup>や<sup>(213)</sup>や<sup>(214)</sup>や<sup>(215)</sup>や<sup>(216)</sup>や<sup>(217)</sup>や<sup>(218)</sup>や<sup>(219)</sup>や<sup>(220)</sup>や<sup>(221)</sup>や<sup>(222)</sup>や<sup>(223)</sup>や<sup>(224)</sup>や<sup>(225)</sup>や<sup>(226)</sup>や<sup>(227)</sup>や<sup>(228)</sup>や<sup>(229)</sup>や<sup>(230)</sup>や<sup>(231)</sup>や<sup>(232)</sup>や<sup>(233)</sup>や<sup>(234)</sup>や<sup>(235)</sup>や<sup>(236)</sup>や<sup>(237)</sup>や<sup>(238)</sup>や<sup>(239)</sup>や<sup>(240)</sup>や<sup>(241)</sup>や<sup>(242)</sup>や<sup>(243)</sup>や<sup>(244)</sup>や<sup>(245)</sup>や<sup>(246)</sup>や<sup>(247)</sup>や<sup>(248)</sup>や<sup>(249)</sup>や<sup>(250)</sup>や<sup>(251)</sup>や<sup>(252)</sup>や<sup>(253)</sup>や<sup>(254)</sup>や<sup>(255)</sup>や<sup>(256)</sup>や<sup>(257)</sup>や<sup>(258)</sup>や<sup>(259)</sup>や<sup>(260)</sup>や<sup>(261)</sup>や<sup>(262)</sup>や<sup>(263)</sup>や<sup>(264)</sup>や<sup>(265)</sup>や<sup>(266)</sup>や<sup>(267)</sup>や<sup>(268)</sup>や<sup>(269)</sup>や<sup>(270)</sup>や<sup>(271)</sup>や<sup>(272)</sup>や<sup>(273)</sup>や<sup>(274)</sup>や<sup>(275)</sup>や<sup>(276)</sup>や<sup>(277)</sup>や<sup>(278)</sup>や<sup>(279)</sup>や<sup>(280)</sup>や<sup>(281)</sup>や<sup>(282)</sup>や<sup>(283)</sup>や<sup>(284)</sup>や<sup>(285)</sup>や<sup>(286)</sup>や<sup>(287)</sup>や<sup>(288)</sup>や<sup>(289)</sup>や<sup>(290)</sup>や<sup>(291)</sup>や<sup>(292)</sup>や<sup>(293)</sup>や<sup>(294)</sup>や<sup>(295)</sup>や<sup>(296)</sup>や<sup>(297)</sup>や<sup>(298)</sup>や<sup>(299)</sup>や<sup>(300)</sup>や<sup>(301)</sup>や<sup>(302)</sup>や<sup>(303)</sup>や<sup>(304)</sup>や<sup>(305)</sup>や<sup>(306)</sup>や<sup>(307)</sup>や<sup>(308)</sup>や<sup>(309)</sup>や<sup>(310)</sup>や<sup>(311)</sup>や<sup>(312)</sup>や<sup>(313)</sup>や<sup>(314)</sup>や<sup>(315)</sup>や<sup>(316)</sup>や<sup>(317)</sup>や<sup>(318)</sup>や<sup>(319)</sup>や<sup>(320)</sup>や<sup>(321)</sup>や<sup>(322)</sup>や<sup>(323)</sup>や<sup>(324)</sup>や<sup>(325)</sup>や<sup>(326)</sup>や<sup>(327)</sup>や<sup>(328)</sup>や<sup>(329)</sup>や<sup>(330)</sup>や<sup>(331)</sup>や<sup>(332)</sup>や<sup>(333)</sup>や<sup>(334)</sup>や<sup>(335)</sup>や<sup>(336)</sup>や<sup>(337)</sup>や<sup>(338)</sup>や<sup>(339)</sup>や<sup>(340)</sup>や<sup>(341)</sup>や<sup>(342)</sup>や<sup>(343)</sup>や<sup>(344)</sup>や<sup>(345)</sup>や<sup>(346)</sup>や<sup>(347)</sup>や<sup>(348)</sup>や<sup>(349)</sup>や<sup>(350)</sup>や<sup>(351)</sup>や<sup>(352)</sup>や<sup>(353)</sup>や<sup>(354)</sup>や<sup>(355)</sup>や<sup>(356)</sup>や<sup>(357)</sup>や<sup>(358)</sup>や<sup>(359)</sup>や<sup>(360)</sup>や<sup>(361)</sup>や<sup>(362)</sup>や<sup>(363)</sup>や<sup>(364)</sup>や<sup>(365)</sup>や<sup>(366)</sup>や<sup>(367)</sup>や<sup>(368)</sup>や<sup>(369)</sup>や<sup>(370)</sup>や<sup>(371)</sup>や<sup>(372)</sup>や<sup>(373)</sup>や<sup>(374)</sup>や<sup>(375)</sup>や<sup>(376)</sup>や<sup>(377)</sup>や<sup>(378)</sup>や<sup>(379)</sup>や<sup>(380)</sup>や<sup>(381)</sup>や<sup>(382)</sup>や<sup>(383)</sup>や<sup>(384)</sup>や<sup>(385)</sup>や<sup>(386)</sup>や<sup>(387)</sup>や<sup>(388)</sup>や<sup>(389)</sup>や<sup>(390)</sup>や<sup>(391)</sup>や<sup>(392)</sup>や<sup>(393)</sup>や<sup>(394)</sup>や<sup>(395)</sup>や<sup>(396)</sup>や<sup>(397)</sup>や<sup>(398)</sup>や<sup>(399)</sup>や<sup>(400)</sup>や<sup>(401)</sup>や<sup>(402)</sup>や<sup>(403)</sup>や<sup>(404)</sup>や<sup>(405)</sup>や<sup>(406)</sup>や<sup>(407)</sup>や<sup>(408)</sup>や<sup>(409)</sup>や<sup>(410)</sup>や<sup>(411)</sup>や<sup>(412)</sup>や<sup>(413)</sup>や<sup>(414)</sup>や<sup>(415)</sup>や<sup>(416)</sup>や<sup>(417)</sup>や<sup>(418)</sup>や<sup>(419)</sup>や<sup>(420)</sup>や<sup>(421)</sup>や<sup>(422)</sup>や<sup>(423)</sup>や<sup>(424)</sup>や<sup>(425)</sup>や<sup>(426)</sup>や<sup>(427)</sup>や<sup>(428)</sup>や<sup>(429)</sup>や<sup>(430)</sup>や<sup>(431)</sup>や<sup>(432)</sup>や<sup>(433)</sup>や<sup>(434)</sup>や<sup>(435)</sup>や<sup>(436)</sup>や<sup>(437)</sup>や<sup>(438)</sup>や<sup>(439)</sup>や<sup>(440)</sup>や<sup>(441)</sup>や<sup>(442)</sup>や<sup>(443)</sup>や<sup>(444)</sup>や<sup>(445)</sup>や<sup>(446)</sup>や<sup>(447)</sup>や<sup>(448)</sup>や<sup>(449)</sup>や<sup>(450)</sup>や<sup>(451)</sup>や<sup>(452)</sup>や<sup>(453)</sup>や<sup>(454)</sup>や<sup>(455)</sup>や<sup>(456)</sup>や<sup>(457)</sup>や<sup>(458)</sup>や<sup>(459)</sup>や<sup>(460)</sup>や<sup>(461)</sup>や<sup>(462)</sup>や<sup>(463)</sup>や<sup>(464)</sup>や<sup>(465)</sup>や<sup>(466)</sup>や<sup>(467)</sup>や<sup>(468)</sup>や<sup>(469)</sup>や<sup>(470)</sup>や<sup>(471)</sup>や<sup>(472)</sup>や<sup>(473)</sup>や<sup>(474)</sup>や<sup>(475)</sup>や<sup>(476)</sup>や<sup>(477)</sup>や<sup>(478)</sup>や<sup>(479)</sup>や<sup>(480)</sup>や<sup>(481)</sup>や<sup>(482)</sup>や<sup>(483)</sup>や<sup>(484)</sup>や<sup>(485)</sup>や<sup>(486)</sup>や<sup>(487)</sup>や<sup>(488)</sup>や<sup>(489)</sup>や<sup>(490)</sup>や<sup>(491)</sup>や<sup>(492)</sup>や<sup>(493)</sup>や<sup>(494)</sup>や<sup>(495)</sup>や<sup>(496)</sup>や<sup>(497)</sup>や<sup>(498)</sup>や<sup>(499)</sup>や<sup>(500)</sup>や<sup>(501)</sup>や<sup>(502)</sup>や<sup>(503)</sup>や<sup>(504)</sup>や<sup>(505)</sup>や<sup>(506)</sup>や<sup>(507)</sup>や<sup>(508)</sup>や<sup>(509)</sup>や<sup>(510)</sup>や<sup>(511)</sup>や<sup>(512)</sup>や<sup>(513)</sup>や<sup>(514)</sup>や<sup>(515)</sup>や<sup>(516)</sup>や<sup>(517)</sup>や<sup>(518)</sup>や<sup>(519)</sup>や<sup>(520)</sup>や<sup>(521)</sup>や<sup>(522)</sup>や<sup>(523)</sup>や<sup>(524)</sup>や<sup>(525)</sup>や<sup>(526)</sup>や<sup>(527)</sup>や<sup>(528)</sup>や<sup>(529)</sup>や<sup>(530)</sup>や<sup>(531)</sup>や<sup>(532)</sup>や<sup>(533)</sup>や<sup>(534)</sup>や<sup>(535)</sup>や<sup>(536)</sup>や<sup>(537)</sup>や<sup>(538)</sup>や<sup>(539)</sup>や<sup>(540)</sup>や<sup>(541)</sup>や<sup>(542)</sup>や<sup>(543)</sup>や<sup>(544)</sup>や<sup>(545)</sup>や<sup>(546)</sup>や<sup>(547)</sup>や<sup>(548)</sup>や<sup>(549)</sup>や<sup>(550)</sup>や<sup>(551)</sup>や<sup>(552)</sup>や<sup>(553)</sup>や<sup>(554)</sup>や<sup>(555)</sup>や<sup>(556)</sup>や<sup>(557)</sup>や<sup>(558)</sup>や<sup>(559)</sup>や<sup>(560)</sup>や<sup>(561)</sup>や<sup>(562)</sup>や<sup>(563)</sup>や<sup>(564)</sup>や<sup>(565)</sup>や<sup>(566)</sup>や<sup>(567)</sup>や<sup>(568)</sup>や<sup>(569)</sup>や<sup>(570)</sup>や<sup>(571)</sup>や<sup>(572)</sup>や<sup>(573)</sup>や<sup>(574)</sup>や<sup>(575)</sup>や<sup>(576)</sup>や<sup>(577)</sup>や<sup>(578)</sup>や<sup>(579)</sup>や<sup>(580)</sup>や<sup>(581)</sup>や<sup>(582)</sup>や<sup>(583)</sup>や<sup>(584)</sup>や<sup>(585)</sup>や<sup>(586)</sup>や<sup>(587)</sup>や<sup>(588)</sup>や<sup>(589)</sup>や<sup>(590)</sup>や<sup>(591)</sup>や<sup>(592)</sup>や<sup>(593)</sup>や<sup>(594)</sup>や<sup>(595)</sup>や<sup>(596)</sup>や<sup>(597)</sup>や<sup>(598)</sup>や<sup>(599)</sup>や<sup>(600)</sup>や<sup>(601)</sup>や<sup>(602)</sup>や<sup>(603)</sup>や<sup>(604)</sup>や<sup>(605)</sup>や<sup>(606)</sup>や<sup>(607)</sup>や<sup>(608)</sup>や<sup>(609)</sup>や<sup>(610)</sup>や<sup>(611)</sup>や<sup>(612)</sup>や<sup>(613)</sup>や<sup>(614)</sup>や<sup>(615)</sup>や<sup>(616)</sup>や<sup>(617)</sup>や<sup>(618)</sup>や<sup>(619)</sup>や<sup>(620)</sup>や<sup>(621)</sup>や<sup>(622)</sup>や<sup>(623)</sup>や<sup>(624)</sup>や<sup>(625)</sup>や<sup>(626)</sup>や<sup>(627)</sup>や<sup>(628)</sup>や<sup>(629)</sup>や<sup>(630)</sup>や<sup>(631)</sup>や<sup>(632)</sup>や<sup>(633)</sup>や<sup>(634)</sup>や<sup>(635)</sup>や<sup>(636)</sup>や<sup>(637)</sup>や<sup>(638)</sup>や<sup>(639)</sup>や<sup>(640)</sup>や<sup>(641)</sup>や<sup>(642)</sup>や<sup>(643)</sup>や<sup>(644)</sup>や<sup>(645)</sup>や<sup>(646)</sup>や<sup>(647)</sup>や<sup>(648)</sup>や<sup>(649)</sup>や<sup>(650)</sup>や<sup>(651)</sup>や<sup>(652)</sup>や<sup>(653)</sup>や<sup>(654)</sup>や<sup>(655)</sup>や<sup>(656)</sup>や<sup>(657)</sup>や<sup>(658)</sup>や<sup>(659)</sup>や<sup>(660)</sup>や<sup>(661)</sup>や<sup>(662)</sup>や<sup>(663)</sup>や<sup>(664)</sup>や<sup>(665)</sup>や<sup>(666)</sup>や<sup>(667)</sup>や<sup>(668)</sup>や<sup>(669)</sup>や<sup>(670)</sup>や<sup>(671)</sup>や<sup>(672)</sup>や<sup>(673)</sup>や<sup>(674)</sup>や<sup>(675)</sup>や<sup>(676)</sup>や<sup>(677)</sup>や<sup>(678)</sup>や<sup>(679)</sup>や<sup>(680)</sup>や<sup>(681)</sup>や<sup>(682)</sup>や<sup>(683)</sup>や<sup>(684)</sup>や<sup>(685)</sup>や<sup>(686)</sup>や<sup>(687)</sup>や<sup>(688)</sup>や<sup>(689)</sup>や<sup>(690)</sup>や<sup>(691)</sup>や<sup>(692)</sup>や<sup>(693)</sup>や<sup>(694)</sup>や<sup>(695)</sup>や<sup>(696)</sup>や<sup>(697)</sup>や<sup>(698)</sup>や<sup>(699)</sup>や<sup>(700)</sup>や<sup>(701)</sup>や<sup>(702)</sup>や<sup>(703)</sup>や<sup>(704)</sup>や<sup>(705)</sup>や<sup>(706)</sup>や<sup>(707)</sup>や<sup>(708)</sup>や<sup>(709)</sup>や<sup>(710)</sup>や<sup>(711)</sup>や<sup>(712)</sup>や<sup>(713)</sup>や<sup>(714)</sup>や<sup>(715)</sup>や<sup>(716)</sup>や<sup>(717)</sup>や<sup>(718)</sup>や<sup>(719)</sup>や<sup>(720)</sup>や<sup>(721)</sup>や<sup>(722)</sup>や<sup>(723)</sup>や<sup>(724)</sup>や<sup>(725)</sup>や<sup>(726)</sup>や<sup>(727)</sup>や<sup>(728)</sup>や<sup>(729)</sup>や<sup>(730)</sup>や<sup>(731)</sup>や<sup>(732)</sup>や<sup>(733)</sup>や<sup>(734)</sup>や<sup>(735)</sup>や<sup>(736)</sup>や<sup>(737)</sup>や<sup>(738)</sup>や<sup>(739)</sup>や<sup>(740)</sup>や<sup>(741)</sup>や<sup>(742)</sup>や<sup>(743)</sup>や<sup>(744)</sup>や<sup>(745)</sup>や<sup>(746)</sup>や<sup>(747)</sup>や<sup>(748)</sup>や<sup>(749)</sup>や<sup>(750)</sup>や<sup>(751)</sup>や<sup>(752)</sup>や<sup>(753)</sup>や<sup>(754)</sup>や<sup>(755)</sup>や<sup>(756)</sup>や<sup>(757)</sup>や<sup>(758)</sup>や<sup>(759)</sup>や<sup>(760)</sup>や<sup>(761)</sup>や<sup>(762)</sup>や<sup>(763)</sup>や<sup>(764)</sup>や<sup>(765)</sup>や<sup>(766)</sup>や<sup>(767)</sup>や<sup>(768)</sup>や<sup>(769)</sup>や<sup>(770)</sup>や<sup>(771)</sup>や<sup>(772)</sup>や<sup>(773)</sup>や<sup>(774)</sup>や<sup>(775)</sup>や<sup>(776)</sup>や<sup>(777)</sup>や<sup>(778)</sup>や<sup>(779)</sup>や<sup>(780)</sup>や<sup>(781)</sup>や<sup>(782)</sup>や<sup>(783)</sup>や<sup>(784)</sup>や<sup>(785)</sup>や<sup>(786)</sup>や<sup>(787)</sup>や<sup>(788)</sup>や<sup>(789)</sup>や<sup>(790)</sup>や<sup>(791)</sup>や<sup>(792)</sup>や<sup>(793)</sup>や<sup>(794)</sup>や<sup>(795)</sup>や<sup>(796)</sup>や<sup>(797)</sup>や<sup>(798)</sup>や<sup>(799)</sup>や<sup>(800)</sup>や<sup>(801)</sup>や<sup>(802)</sup>や<sup>(803)</sup>や<sup>(804)</sup>や<sup>(805)</sup>や<sup>(806)</sup>や<sup>(807)</sup>や<sup>(808)</sup>や<sup>(809)</sup>や<sup>(810)</sup>や<sup>(811)</sup>や<sup>(812)</sup>や<sup>(813)</sup>や<sup>(814)</sup>や<sup>(815)</sup>や<sup>(816)</sup>や<sup>(817)</sup>や<sup>(818)</sup>や<sup>(819)</sup>や<sup>(820)</sup>や<sup>(821)</sup>や<sup>(822)</sup>や<sup>(823)</sup>や<sup>(824)</sup>や<sup>(825)</sup>や<sup>(826)</sup>や<sup>(827)</sup>や<sup>(828)</sup>や<sup>(829)</sup>や<sup>(830)</sup>や<sup>(831)</sup>や<sup>(832)</sup>や<sup>(833)</sup>や<sup>(834)</sup>や<sup>(835)</sup>や<sup>(836)</sup>や<sup>(837)</sup>や<sup>(838)</sup>や<sup>(839)</sup>や<sup>(840)</sup>や<sup>(841)</sup>や<sup>(842)</sup>や<sup>(843)</sup>や<sup>(844)</sup>や<sup>(845)</sup>や<sup>(846)</sup>や<sup>(847)</sup>や<sup>(848)</sup>や<sup>(849)</sup>や<sup>(850)</sup>や<sup>(851)</sup>や<sup>(852)</sup>や<sup>(853)</sup>や<sup>(854)</sup>や<sup>(855)</sup>や<sup>(856)</sup>や<sup>(857)</sup>や<sup>(858)</sup>や<sup>(859)</sup>や<sup>(860)</sup>や<sup>(861)</sup>や<sup>(862)</sup>や<sup>(863)</sup>や<sup>(864)</sup>や<sup>(865)</sup>や<sup>(866)</sup>や<sup>(867)</sup>や<sup>(868)</sup>や<sup>(869)</sup>や<sup>(870)</sup>や<sup>(871)</sup>や<sup>(872)</sup>や<sup>(873)</sup>や<sup>(874)</sup>や<sup>(875)</sup>や<sup>(876)</sup>や<sup>(877)</sup>や<sup>(878)</sup>や<sup>(879)</sup>や<sup>(880)</sup>や<sup>(881)</sup>や<sup>(882)</sup>や<sup>(883)</sup>や<sup>(884)</sup>や<sup>(885)</sup>や<sup>(886)</sup>や<sup>(887)</sup>や<sup>(888)</sup>や<sup>(889)</sup>や<sup>(890)</sup>や<sup>(891)</sup>や<sup>(892)</sup>や<sup>(893)</sup>や<sup>(894)</sup>や<sup>(895)</sup>や<sup>(896)</sup>や<sup>(897)</sup>や<sup>(898)</sup>や<sup>(899)</sup>や<sup>(900)</sup>や<sup>(901)</sup>や<sup>(902)</sup>や<sup>(903)</sup>や<sup>(904)</sup>や<sup>(905)</sup>や<sup>(906)</sup>や<sup>(907)</sup>や<sup>(908)</sup>や<sup>(909)</sup>や<sup>(910)</sup>や<sup>(911)</sup>や<sup>(912)</sup>や<sup>(913)</sup>や<sup>(914)</sup>や<sup>(915)</sup>や<sup>(916)</sup>や<sup>(917)</sup>や<sup>(918)</sup>や<sup>(919)</sup>や<sup>(920)</sup>や<sup>(921)</sup>や<sup>(922)</sup>や<sup>(923)</sup>や<sup>(924)</sup>や<sup>(925)</sup>や<sup>(926)</sup>や<sup>(927)</sup>や<sup>(928)</sup>や<sup>(929)</sup>や<sup>(930)</sup>や<sup>(931)</sup>や<sup>(932)</sup>や<sup>(933)</sup>や<sup>(934)</sup>や<sup>(935)</sup>や<sup>(936)</sup>や<sup>(937)</sup>や<sup>(938)</sup>や<sup>(939)</sup>や<sup>(940)</sup>や<sup>(941)</sup>や<sup>(942)</sup>や<sup>(943)</sup>や<sup>(944)</sup>や<sup>(945)</sup>や<sup>(946)</sup>や<sup>(947)</sup>や<sup>(948)</sup>や<sup>(949)</sup>や<sup>(950)</sup>や<sup>(951)</sup>や<sup>(952)</sup>や<sup>(953)</sup>や<sup>(954)</sup>や<sup>(955)</sup>や<sup>(956)</sup>や<sup>(957)</sup>や<sup>(958)</sup>や<sup>(959)</sup>や<sup>(960)</sup>や<sup>(961)</sup>や<sup>(962)</sup>や<sup>(963)</sup>や<sup>(964)</sup>や<sup>(965)</sup>や<sup>(966)</sup>や<sup>(967)</sup>や<sup>(968)</sup>や<sup>(969)</sup>や<sup>(970)</sup>や<sup>(971)</sup>や<sup>(972)</sup>や<sup>(973)</sup>や<sup>(974)</sup>や<sup>(975)</sup>や<sup>(976)</sup>や<sup>(977)</sup>や<sup>(978)</sup>や<sup>(979)</sup>や<sup>(980)</sup>や<sup>(981)</sup>や<sup>(982)</sup>や<sup>(983)</sup>や<sup>(984)</sup>や<sup>(985)</sup>や<sup>(986)</sup>や<sup>(987)</sup>や<sup>(988)</sup>や<sup>(989)</sup>や<sup>(990)</sup>や<sup>(991)</sup>や<sup>(992)</sup>や<sup>(993)</sup>や<sup>(994)</sup>や<sup>(995)</sup>や<sup>(996)</sup>や<sup>(997)</sup>や<sup>(998)</sup>や<sup>(999)</sup>や<sup>(1000)</sup>や<sup>(1001)</sup>や<sup>(1002)</sup>や<sup>(1003)</sup>や<sup>(1004)</sup>や<sup>(1005)</sup>や<sup>(1006)</sup>や<sup>(1007)</sup>や<sup>(1008)</sup>や<sup>(1009)</sup>や<sup>(1010)</sup>や<sup>(1011)</sup>や<sup>(1012)</sup>や<sup>(1013)</sup>や<sup>(1014)</sup>や<sup>(1015)</sup>や<sup>(1016)</sup>や<sup>(1017)</sup>や<sup>(1018)</sup>や<sup>(1019)</sup>や<sup>(1020)</sup>や<sup>(1021)</sup>や<sup>(1022)</sup>や<sup>(1023)</sup>や<sup>(1024)</sup>や<sup>(1025)</sup>や<sup>(1026)</sup>や<sup>(1027)</sup>や<sup>(1028)</sup>や<sup>(1029)</sup>や<sup>(1030)</sup>や<sup>(1031)</sup>や<sup>(1032)</sup>や<sup>(1033)</sup>や<sup>(1034)</sup>や<sup>(1035)</sup>や<sup>(1036)</sup>や<sup>(1037)</sup>や<sup>(1038)</sup>や<sup>(1039)</sup>や<sup>(1040)</sup>や<sup>(1041)</sup>や<sup>(1042)</sup>や<sup>(1043)</sup>や<sup>(1044)</sup>や<sup>(1045)</sup>や<sup>(1046)</sup>や<sup>(1047)</sup>や<sup>(1048)</sup>や<sup>(1049)</sup>や<sup>(1050)</sup>や<sup>(1051)</sup>や<sup>(1052)</sup>や<sup>(1053)</sup>や<sup>(1054)</sup>や<sup>(1055)</sup>や<sup>(1056)</sup>や<sup>(1057)</sup>や<sup>(1058)</sup>や<sup>(1059)</sup>や<sup>(1060)</sup>や<sup>(1061)</sup>や<sup>(1062)</sup>や<sup>(1063)</sup>や<sup>(1064)</sup>や<sup>(1065)</sup>や<sup>(1066)</sup>や<sup>(1067)</sup>や<sup>(1068)</sup>や<sup>(1069)</sup>や<sup>(1070)</sup>や<sup>(1071)</sup>や<sup>(1072)</sup>や<sup>(1073)</sup>や<sup>(1074)</sup>や<sup>(1075)</sup>や<sup>(1076)</sup>や<sup>(1077)</sup>や<sup>(1078)</sup>や<sup>(1079)</sup>や<sup>(1080)</sup>や<sup>(1081)</sup>や<sup>(1082)</sup>や<sup>(1083)</sup>や<sup>(1084)</sup>や<sup>(1085)</sup>や<sup>(1086)</sup>や<sup>(1087)</sup>や<sup>(1088)</sup>や<sup>(1089)</sup>や<sup>(1090)</sup>や<sup>(1091)</sup>や<sup>(1092)</sup>や<sup>(1093)</sup>や<sup>(1094)</sup>や<sup>(1095)</sup>や<sup>(1096)</sup>や<sup>(1097)</sup>や<sup>(1098)</sup>や<sup>(1099)</sup>や<sup>(1100)</sup>や<sup>(1101)</sup>や<sup>(1102)</sup>や<sup>(1103)</sup>や<sup>(1104)</sup>や<sup>(1105)</sup>や<sup>(1106)</sup>や<sup>(1107)</sup>や<sup>(1108)</sup>や<sup>(1109)</sup>や<sup>(1110)</sup>や<sup>(1111)</sup>や<sup>(1112)</sup>や<sup>(1113)</sup>や<sup>(1114)</sup>や<sup>(1115)</sup>や<sup>(1116)</sup>や<sup>(1117)</sup>や<sup>(1118)</sup>や<sup>(1119)</sup>や<sup>(1120)</sup>や<sup>(1121)</sup>や<sup>(1122)</sup>や<sup>(1123)</sup>や<sup>(1124)</sup>や<sup>(1125)</sup>や<sup>(1126)</sup>や<sup>(1127)</sup>や<sup>(1128)</sup>や<sup>(1129)</sup>や<sup>(1130)</sup>や<sup>(1131)</sup>や<sup>(1132)</sup>や<sup>(1133)</sup>や<sup>(1134)</sup>や<sup>(1135)</sup>や<sup>(1136)</sup>や<sup>(1137)</sup>や<sup>(1138)</sup>や<sup>(1139)</sup>や<sup>(1140)</sup>や<sup>(1141)</sup>や<sup>(1142)</sup>や<sup>(1143)</sup>や<sup>(1144)</sup>や<sup>(1145)</sup>や<sup>(1146)</sup>や<sup>(1147)</sup>や<sup>(1148)</sup>や<sup>(1149)</sup>や<sup>(1150)</sup>や<sup>(1151)</sup>や<sup>(1152)</sup>や<sup>(1153)</sup>や<sup>(1154)</sup>や<sup>(1155)</sup>や<sup>(1156)</sup>や<sup>(1157)</sup>や<sup>(1158)</sup>や<sup>(1159)</sup>や<sup>(1160)</sup>や<sup>(1161)</sup>や<sup>(1162)</sup>や<sup>(1163)</sup>や<sup>(1164)</sup>や<sup>(1165)</sup>や<sup>(1166)</sup>や<sup>(1167)</sup>や<sup>(1168)</sup>や<sup>(1169)</sup>や<sup>(1170)</sup>や<sup>(1171)</sup>や<sup>(1172)</sup>や<sup>(1173)</sup>や<sup>(1174)</sup>や<sup>(1175)</sup>や<sup>(1176)</sup>や<sup>(1177)</sup>や<sup>(1178)</sup>や<sup>(1179)</sup>や<sup>(1180)</sup>や<sup>(1181)</sup>や<sup>(1182)</sup>や<sup>(1183)</sup>や<sup>(1184)</sup>や<sup>(1185)</sup>や<sup>(1186)</sup>や<sup>(1187)</sup>や<sup>(1188)</sup>や<sup>(1189)</sup>や<sup>(1190)</sup>や<sup>(1191)</sup>や<sup>(</sup>

信念批判して『は』そう小ちよいものではあります。生活に徹したものですから。

ないかせ<sup>(57)</sup>思ひます。結局日本の女の作家の粒は『さう』大きくないのでござりますけれども、真剣に生きているという感じがするのでござりますけれどもね。

白田 由起さんからも、この間伺つたのですが、そういう新しい文学といつものは、従<sup>(58)</sup>來の職人的な立場に立つて書き進む人は到底残つてしまつて、むしろ全然違つた土壤から出て来る人の方に、或る意味の期待がかけられるという点も確かにありますけれども、由起さん、先程から小説をお書きになつた動機も伺つたのでござりますけれども、由起さんを創造しているもの、それはやはり島村なやか〔赤い部屋〕などを見ますというと、西欧的な思想というものが自然に生み出したもののように出ておりますが、そういうお<sup>(60)</sup>方によつて、又一つ日本の女流文学史が新らしい十〈意〉義を加えたという時が来たように思うのですが、その辺での由起さんが、どういう役割を果されるかという何か自覚をお持ちでいらっしゃいますか。何かその辺の御<sup>(61)</sup>意見を一つ伺いさせて頂きたいと思います。

由起 私こういうことを申しますの大変可笑しいことかも知れませんけれども、よく批評の中に教養があるとかということをお書きになる方がござりますけれども、そういうこ<sup>(62)</sup>とをおっしゃられるのは、本当に私は意外だと思います。自分のためにも意外だし、世界のためにも意外だと思います。それは世界からでも見たら分ると思ひますけれども、文学にしろ教養と名前をつけられる程私は知つて<sup>(63)</sup>いないのでござります。

## 五 「土壤」の「壤」を鉛筆で丸く囲む。

## 六 「利休の話」は当該原稿内に記載無し。

その知らないものをやつとしさで書いているものを、人の目に教養といふに取られるのは、余程教養というものは程度の低いものではないかと思うのです。だから若しも小説でも書こうて、何も<sup>(64)</sup>小説のためにそれだけの学問をしなければならない、そういうものではないのでしょうかけれども、いろいろな外国の小説のことなんかを思いますと、いろいろな知識がもつと高いものがあつて、読んでいても読みござが<sup>(65)</sup>す」と思うのでござります。そこに出で来る言葉の端々でも、何でももつと行き渡つた知識というものが窺えると思うのですけれども、そういうようなものが余り問題にされていないような気がするので、どうな<sup>(66)</sup>んででしょうね。私は外の方は知らないのですけれども、とにかく自分がそんなことを一言でも二言でも、皆様から御批評を頂く度毎に、余りの意外さに驚いてしまうのです。そんなことで、書く小説とか人間に対して、そんな言葉が与えら<sup>(67)</sup>れるということは何か間違つてゐるのぢやないかと思いますネ。何かの標準が狂つてゐるのぢやないかと思います。それは御質問の答えにはならないかも知れないけれども……。これは少し長くなりましたが、外国の<sup>(68)</sup>人達が言つてゐる教養というものは、こんな程度のものぢやないと想ひます。本に言つておりますけれども、もう少し専門のことに関しても、しつかりした答えができるけれども、もう少し専門のことに関しても、しつかりした答えができるようなものを持つてゐる人が教養があるというのぢ<sup>(69)</sup>やないでしようか。余り何も知らないでいる者に、そんなことを皆が考へるというのは変じやないかと思います。

白田 先程のお話にも出ましたように、利休の話が出て來たのですが、

河森<sup>?</sup>〈盛〉さんが日本<sup>(70)</sup>の中の人で知識人と言える知識人を挙げるといふと、利休というお話でございました。そういうお話を出まして、その利久<sup>(71)</sup>という人は、芸術家としての一面が植つていると同時に、奇行家のようになっている一面が話に出て<sup>(72)</sup>来るわけで、それが商人的な魂で行われているが、芸術家として貫いたのか、■■■非常に疑問になるといふことが、今話題になつておつたわけでござりますけれども、その際由起さんが、とにかく商人ならいい加減なもの<sup>(73)</sup>を意義あるもののように鑑定して、芸術家だったら、金儲けだとか、政治的な意欲だとか、いろいろなことを考へている時間がないのじやないかといふ、非常にはつきりした純粹なお話が出ておつたのでございますが、まあ<sup>(74)</sup>由起さんの、商人の中に入れれば物の見方というものがやはり隅々まで溢れていると思うのでございますが、それは教義とか何とかということ別にして、女性の見方にそういうことが出ていると、確かにそういうことが日本<sup>(74)</sup>の女性じやないかという情緒的なものを期待されているような日本文学、そういう情緒的なものだけで、すべて続けられなさつたら、それは女流文学の振興<sup>(75)</sup>というものは期待せられてよいものだと思いますけれども、今後の『女性文学』というようなものについて、先生の御意見、特にこの平安朝時代には、ああした男性を圧して、あれ程の作品を生み出したあのときの条件、それから現在の女性作家が負わされている条件と、どこに道があるか。二<sup>(76)</sup>一歴史的な観点から伺いたいと思います。

**折口** 私は利休でも、利休がやはり曾つて持つておつた富というものを、立どころに持えたあの時代は、やはりああいうものを、室町から織田、豊臣へかけて、あの豪華な時代<sup>(77)</sup>は、持つてなくとも持つてもど

にかく大きな富が入つて来ることになつてゐるから、富の力といふか、成金の力、それで何でもしていると思う。だからあの時の私に感じたことでも、或いはあなたなんか見まして、あの豪華<sup>(78)</sup>華さというものは、私はやはり本心的なものじやないと思います。そう言うと悪いけれども普通の人が考へているようなものじやない。つまり時代が持つてゐる富の力を押し出したまさに溢れている。だから利久<sup>(79)</sup>もあり豪華<sup>(79)</sup>で、成金主義であるが、併し、世間ではそうは言わない。そう言わなければ、疑問などは持つていなし、責める世間も勿論ないと思う。あの力で押し出した芸術も、それがその次には元禄になつて來てゐるけれども、元禄<sup>(80)</sup>にはやはりあれだけ偉い人が出で来るといふことも、やはりその時代がよかつたからということは誰も言つてゐない。とにかく富の力があれば押し出したと、つまり成金時代が押し出したのだから、今見たいな考えをすると<sup>(81)</sup>、いうそんな時代から、こういうものができることがない。だから評価を軽く見ては■いけないとと思う。だから利休という者は、利休の堺の商人として持つた富が、利休の元になつてゐる。極く低く見て利休に対する評価とい<sup>(82)</sup>うものは、やはり利休が持つておつた富が利休の背景になつてゐる。極く低く見て利休に対する評価といふものは、やはり利休が持つておつた富に掛けて評価していると、それは利休の評価と全然違つた面だから、批評する<sup>(83)</sup>人はそれを勝手にして批評している。だから由起さんに反問するけれども、しげ子さんの住んでおつた家庭というものが、やはり世間が由起さんを非常に高い教養を持つてゐるというように見てかかっているのだと思う。直<sup>(84)</sup>ぐに批評といふものを持ち出したからね。例えば芝居の役者に「一字空白」〈河井合<sup>合</sup>〉武末〈雄〉と

いう役者があつた。又喜多村綠郎というのがあつたが、喜多村を何でも九州じや旧の文学だといふうにいつでも批評する。吉右衛門と菊五郎を比べる<sup>(85)</sup> というと、片一方は派手で、片一方は地味だといふう批評できない。吉右衛門は派手な中に地味なところがあり、菊五郎は地味の中でも派手なところがあるから、批評家の批評に変らない。批評の方に入らない。だから私は『<sup>(86)</sup> 批評家がそういうふうならば、批評家であればうまい批評で、我々が信頼して、作家達が本当にその批評の言うことを元にして進んで行つてもよいのだけれども、一葉みたいなことになる。そういう意味で感心させられる方<sup>(87)</sup> 』が少い。いろ／＼やはりそういうふうに一諸の方に早まつた批評をしていいのだし、作家自身はよく頭の中へ入つているから分るかと思う。作家は自分の家だけしか知らないから、男の作家は女の作家を軽蔑するようになる<sup>(88)</sup> 』と思う。作家には外の生活の途がない。だから自分の作品も途がないということになる。だから男の作家の非常に先輩達の達者なのを見ると我々はいやになる。併し読んでると樂だから読んでる。だから大衆物の方が読んで』よいものじやないけれども、六十点か七十点から面白味は持つていてくれども、とにかく面白味があるに違ひから大衆物に初めからかかる。眞面目に書いた文学といふものは読んできりがない。こつちの期待に叛かれること<sup>(89)</sup> のを沢山読まれるからやはり大衆作家といふものがこの点信頼を置かれている。やはり大衆作家といふものや、本格的な文学といふものはきりがないことだけれども、低い大衆が読んで行くのはああしたもの。併し、作家<sup>(90)</sup> になれば結局押しつまつたならば一生懸命に書いていいような小説を書いて非常にあつけないものができたりするが、大衆

小説を書いている間楽しいと思う。平林さんが書くのを見ると、楽しいという気持があるらしいと<sup>(91)</sup> いう気持がする。私もそれは無為に大衆小説を見まして、その変り併し、名前なんか知らない。名前見ずに読んでいた。そういうものが、やはり一葉にやはり信用できない小説を見せられました。やはりむしろ初めからワ<sup>(92)</sup> 』一ソット笑つたりするようなものを欲する傾向がありますね。

**平林** だけれども私由起さんについて、つまり私共『のやうな作家』は私生活といふものに密着してしまつて、それを離れるだけの力がないのです。『<sup>(93)</sup> その点』男の人は多かれ少なかれ実生活といふものから或る程度離れて抽象的に生きる力を持つてゐるのです。併し我々は実は実生活に密着<sup>(94)</sup> してしまつて、それも四十回も離れる力を持つてゐるのです。併し、あなたは或る程度実生<sup>(95)</sup> 活といふものから離れ『<sup>(96)</sup> られ』る氣持を持つていらっしゃるのです。

**由起** そうでしょうか。併し、それが余りこままでないから……。

**平林** 曲本の家庭生活<sup>(97)</sup> やアーティカルの生活<sup>(98)</sup> 』『に』津々木幸子<sup>(99)</sup> 連山<sup>(100)</sup> が、おれども、ヒトからわゆる大衆の作家『これは、日本の婦人作家が、どんな土壤から出てゐるかといふこと、関連したことで今までの所では半ば運命的なことでしたが、井林<sup>(101)</sup> すれども、津尾さんとか宮本さんなんかは別<sup>(102)</sup> 『生き方ができま』して、農業生活をひや密着<sup>(103)</sup> して、人生の自由と人間性をひやかの束縛<sup>(104)</sup> から離れたと思つたとおれども併し、それをあなたは離<sup>(105)</sup> されて抽象的に生きます。あなたが教養といふものを、あなたが『もつて』ないとおつしやつたので、私も『いはゆる教養といふものについては』そな

しらうと思うのですけれども、ただあなたたは『音楽を勉強されて、さういふものからも、感情や情緒を形成されてゐるし、七過去からの御身分も(38)食べるとか住むとかいふことから一応離れて思想や感情を伸ばすゆとりをもつていらして』  
『ややかまを生氣のよき』  
『やわらかくやわらかと思ふのです。そういうものがあなたの中にある』  
『(マ)のものを醸してゐる』と思うのです。そういうものが我々にはない『』  
『(成りしたのち)自分で』  
『幾らか本を読んで若干の知識というものを『もつてはゐます』が、それも教養というものには(39)『です』ならないので、その点あなたたは非常な幸福な環境と、それから……。

由起 幸福かどうかは最近……。

折口 幸福というと怒りましようよ。(笑声)

由起 私が幸福でいるかどうかは自分のこととですから……。

平林 女が実生活から離れないということが、男より劣っている点じやないかと思います。

由起 私も赤ちゃんにおっぱいを飲ませた(10)り、子供の世話ということとか、そういうことに関しては本当に離れるどころじゃない。本当に密着している気持なんですが、それ以外に男の人に務めるとか、何とかというようなことは、そんなことはとくに半ばな(11)性格を持つてゐるのじやないかと思います。務めるということは、何か外のことで以て変えることができる。世話女房という者があつて何から今までお世話を、靴下も靴も履かせるとか、そこまでが必要で、そういうことは(12)しないで落ちついているのがよいのか、そういう見解を一々させて行けば、女と男の人の愛情というもので必要欠くべからざるといふものは台

七 「革本を持やすゆわけや本をなす」の右傍に鉛筆で開むように「」の形で線を引き、右上に「?」を記載。

所の仕事とか、いろいろなものがつきまとつたりするような、そういう所の仕事とか、いろいろなものがつきまとつたりするような、そういうようなど(14)ころは余り許されることではないかしらと私は思うのです。今まで習慣では出掛けるときにオーバーを着せるなどということもありましようけれども、それは習慣であつて、若しそういう習慣がなければそんなことは愛情の(15)印しではなだらうと思います。併し、皆奥さんといふ者は、そういうふうにいろいろなことをするという習習はあるので、それをしなければ愛情がないというふうに決めてしまふ。そういうことで愛情を指定されるということ(16)は間違いなんです。

平林 世話女房というのは『――』、どんなに『夫に』オーバーを着せかけてやつても『やらなくとも』、世話女房と世話女房でないのと二つあると思うのです。『やらなくとも』世話女房といふのは、『せまい日常生活の』仕事にしがみつい(17)たきり(18)世話女房といふのはよい『ものといふ』ことになつて、いるのですけれども、『側れば愛情半ばゆ』  
『どちらかといへば、みづちい花の』  
『本など半竹の花などかくや』  
『やうなものであつて、美しい花の咲いたような、バラの花の咲いたような愛情』(19)いうものじやない。

由起 それはよく分ります。花が咲いたようなものといふのは、形の上でも心の上でも相方なのでですか。そうではなくて心の中で花が咲いたのでしよう。(19)

平林 そうでしょう。併し言葉で言い表せないのでけれども、若し自分御亭主が酒を飲んで酔っぱらつて、よその男と喧嘩をしていくと聞いて、はだしで飛び出して行くというようなおかみさん、それも美しい愛情で(19)す。併し、我々の夫婦愛といふものは、そういうものじや『あたりたく』ない。むしろ酔っぱらつて喧嘩している亭主をじろつと見るよ

うな、そういうものに我々はあこがれている。ところが私なんぞははだして飛び出して行く方なんです。』<sup>(11)</sup>

**由起** 私もはだしで飛び出して行く方なんですよ。(笑声)「一字空白」

そう有りたいものだと思っております。大体そういうふうに……。

**白田** 直ぐに飛び出せるか、飛び出せないか……。(笑声)<sup>(12)</sup>

**平林** 沢一さんの相手の『併と書いましたが』お里ですか、あの人は高く評価してよいと思います。お里自身であるということとは、随分違うでしょう。そこだと思うのですよ。

**由起** それは何か私も非難されてよいこと<sup>(13)</sup>はあるのですけれども、私が冷い人間だというふうに思われることは、本当に私は悲しいと思いますのよ。

**平林** いえ……。私は非常にあこがれているのですから……。<sup>(14)</sup>

**折口** 「すまし」型と「ざつくばらん」型ですね。

**平林** 併し、そうなれば私はざつくばらんの方になるのです。

**折口** やはり本体論になるけれども、それから離れられないので、平林さんの話としげ子<sup>(15)</sup>さんの話と本体が違うのだと思う不。

**白田** 確かに本体は違いますネ。

**折口** 先のことは私には分りませんけれども、つまり批評でも書いて見なければ分らないし、期待して書くような批評なんとも<sup>(16)</sup>のはほんの僅かのことしか分らない。批評というのも、作家の或る面を支配するものでなければ批評でないのだから、だから実際批評のことは分りま

八 上部欄外に、黒ペンで「こゝの所いま一度速記の原稿みて下さい。わかりません。」と記載。

せん。併し、歌とか小説と非常に離れているけれども、歌が一つの面か<sup>(17)</sup>今までの日本の女流文学の形に出でておりますから、だから歌で言うたらあれは分りやすいかも知れませんね。岡本かの子さんは、あの歌をやつてたらば生涯実力が分らないでしようね。かの子さんに我々も一諸になつて<sup>(18)</sup>雑誌を出そなんとすることを相談したのです。岡本かの子さんはコツ～とした人じやないけれども、我々そう思つていたのです。それまだかの子さん何か計画したけれども、結局歌の方は思い切つた。それから何分書<sup>(19)</sup>いて、相当なもの書いた。それで私あれだけの人になるとは思いませんでした。まだどうかすると、かの子さんに世間が高く評価し過ぎているのではないかしらと思うぐらいの子さんそういう点ばかり見ている。併し、<sup>(20)</sup>あの歌で言つていたから悪いので、今後小説なんかに行く人だったのでしょうか不。だからあの人は抒情的な人なんだから、抒情的にもう自由に行けるのに、抒情的になり切つて行けないのでしょうね。丁度あの時分にかの子<sup>(21)</sup>さんだと、あの今井邦子さん、つまり山田邦子さん、市倉節子さんという人で「あららぎ」をやつて來た。あの時分に、つまりあららぎ時代、低い人から喜ばれないような固い文学を見るけれども、女の女は着いて行けなかつた。だ<sup>(22)</sup>から「あららぎ」が出た後に、確信は皆持つていていたと思うのです。労苦を追つてしまつて、日本の歌に一葉などの労苦といふものがないと可笑しいので、昔は、あれ程女が歌を作つて、我々歌を考えたときに歌を考えられたものだか<sup>(23)</sup>ら、眞面目な女が歌を作るということは間違いでないね。女が作った歌もよいということも間違いでないね。とにかく明治の末から、大正、昭和と騰つて來たあららぎ時代は、あれは歌に

違いない。晶子さん時代が、あららぎ時代に入つて、やはり避けられてしまつた。これで抒情文学というものが、ここにところで又復興しない。未だに女のは抒情以外の新らしいものを発見していない。男の方は、何かかんか外の方に行つてゐる。女は無氣力じやないのだ。昔からあららぎ時代を通つて來たから無氣力じやないのだから何かよいものを見つけて貰いたい。かの子さんの文学の「よさ」というものは、「よさ」というかどうか……、皆なが受取つてゐるところは、抒情的なところで、抒情的なところで受取られているのだから、或いは一番簡単な考え方から言えれば、抒情的なもつと力を得て来るだらうと、その抒情的なものというものは、やはり昔の抒情的な足を深く見てゐるような小説はもういけない。何か形が幾らか變つて来るだらうと、それだけ分るけれども、それから先のことは分らない。

**平林** 私共、小説を書く前にあららぎ派の或る一面で非常に教えられたのでござります。

**折口** 今まで朝廷についての文学はありませんし、だから女は皆な潰れてしまつたのです。歌ではそろ／＼女は生き返つたんだらうと思いますけれども、それが小説の支配になるかどうか分りません。

**白田** 斎藤茂吉の歌なんかについて、何かお考えがあるでしょうか。

**平林** 私は斎藤茂吉『さん』の歌は基本ですが、「朝の歌」などは、全部見て頂いておりますけれども、この後の歌は斎藤さんの歌と『』しても、或いは曲分の當時の歌を選していらっしゃいますね。どういう歌が選ばれているかということで、あの本の『この頃の』志が分るような気がするのです。

**折口** ただ沢山見ていると、こんなつまらん歌というところがあります。それが誰れにでも批評の頓智にそれが出て来ましたから、やはり困るのでしよう。そうすると斎藤さんのを読んでいると、とんでもないことを言います不。斎藤さん自身は立派なものを作ります不。それが今でもできるものだから偉いのです不。

**白田** 平林さんこの間大宰府の天満宮においてになりましたが、終戦直後の二十一年でしょうか。

**平林** 二十四年九月年頭でございます。

**白田** あそここの宮司というものが非常に熱情家で、その人が終戦直後非常に失望をしておつたということです。天皇尊敬の問題ですか。

**平林** こういうことを言つておりました。天皇がキリスト教に帰依されるという噂があるが、それでは、自分達の、天満宮の仕事、理想はもう無駄だというようなことを言つておられましたけれども、私は絶対にそんなことはありません。私はそういうことを聞いたことはありませんけれども、天皇がキリスト教に帰依するということはありませんから、『と。』私は何も証拠はないが、『絶対に』保証しますわからと言つたら、そうですかと、信用していませんでした。たけれども、後になつたらお分りになつたと思ひます。

**白田** そういう話で、信仰というものの実質というものを非常に突かれたお話で、そういうところに又美謙型、謙謙型というふうに『』言われる

九 □は直接黒ペンで「四」と上書きされているため、原表記が「一」か「三」か判読不明。  
一 傍記は鉛筆書き。□は判読不明。「美謙」を「美女」に訂正する際、「美」は同じであるということを示した記号カ。

のでありますけれども、後は別な粒があるということですね。それで平林さんの何物かを、私に分るような気がするのですがね。折口先生によつて、今女流文学の分野です。やはり抒情的な面という<sup>(13)</sup>ものを、一つ御指摘になられて、確かに今の日本で、本当に抒情的なものを提出するのは、川端さんなんか非常に抒情という言葉に、抒情という言葉は<sup>(14)</sup>言い表せない非常に別個な抒情を展開しているわけですが、女性の方も<sup>(15)</sup>『だから同じ<sup>(16)</sup>抒情と言つても随分違つた形で出て来ることができるだろうと思いますけれども、由起さんのお話の中にも、日本の従来の女性が現わして来ました情緒的なという一種の抒情というものが、むしろそこに違うよう<sup>(17)</sup>なものを文章の中から私は受取つてゐるのですが、それを何とかして日本の文運というようなものを、女性の力によつて満すことができるようにしてみたいと思うのです。それは何と言つても話せぬ〈母〉という立場、これが一つの大<sup>(18)</sup>きな何物かをもたらす原動力になるのじやないかと思うのですが、そういう方面はどうなんだとか、そういうようなものがやはり多いように思うのですが……。それからもう一つは、アメリカの女流作家といふものは、「風と共に」のミッチャエル、あの人は四十いくつかに「二字空白」をして、あの一作で終つた<sup>(19)</sup>、ようでござりますけれども、とにかくアメリカは女流作家をどんく生み〈出〉して來ているようです。だからやはり日本の女性の中にも大きなものを今の世においても示して呉れる方があつてもよろしいのではないか。宮本さん<sup>(20)</sup>なんかは随分長いものを書き続けてゐるよ

うですね。日本の女流作家の中には、アメリカのパールバッカとか、ミッチャエルとかというような人が出ない。立派作品を生み出すのに、何か欠けている条件があるのかどうか。そう<sup>(21)</sup>いうことを一つお尋ねしたいのですが。平林さん、どうでしようかね。

**平林** それはやはりさつき私が言いましたように、日本の家庭生活が女を家事に縛りつけているのです。それが前からの習慣でござ<sup>(22)</sup>いまして、日本の家事というのは實にいやな仕事で、女の性格を変える力を持つてゐるのじやないかと思うのです<sup>(23)</sup>。『<sup>(24)</sup>仲良せぬ、其机未<sup>(25)</sup>全體を見<sup>(26)</sup>』<sup>(27)</sup>ことができない性格が、日本の女に《そこから発生して》あるのじやないかと思います。それを離れて、『<sup>(28)</sup>ああいうふうな作家が出ることができないのです。併し、まあ段々教育の制度も變つて来ましたし、生活の条件も變つて来ましたから、これからはそうでもないだらうと思います。併し、少々<sup>(29)</sup>今まででは、そういう環境に若<sup>(30)</sup>抵抗できた人だけが作家としてやつて來たわけです。けれども、それ《の人々》だつて、その《抵抗》力<sup>(31)</sup>は少いものです。『<sup>(32)</sup>かや』<sup>(33)</sup>アメリカと生活条件が非常に違う家庭生活じやないかと思うのです。家庭及び社会の習慣が違うのです。』<sup>(34)</sup>

**臼田** ブロンディ<sup>(35)</sup>という漫画を見ると、女と男が逆になつて、ブロンディよりダグウッドの方が家事に縛られているようなところが出ていて、非常に面白く見てゐるのですが、併し、ああいうこと<sup>(36)</sup>に出来ないとなると、『<sup>(37)</sup>随分これは皮肉な話で、所先<sup>(38)</sup>右傍に「ショセン」女と男の位置<sup>(39)</sup>いうものですね。女も男も同じだ<sup>(40)</sup>ことが、由起さん<sup>(41)</sup>出ましたが、どういう違いか<sup>(42)</sup>ということですね。とにかく今の生活を否定す

ることはできますけれども、併し、その次の『生活』というものが、どんな形で出るかです。随分これはまあ難しい問題かも知れませんけれども、由起さん、フランスなんかの方の家庭生活はどうでございましょうか。

**由起** 私はフランスの家庭生活はよく存じ<sup>(12)</sup>ませんけれども、やはり日本的生活と同じことございましょう。それは一般普通の考え方では、やはり何か専門家という人ですがね。ピアニストとか、科学者とか、作家であるという人は存じませんけれども、そういう人は『生活<sup>(13)</sup>』といふのから、作家というために沢山時間を取つてもよいという了解がござります。又沢山取らなければ仕事ができないという程度のものじゃないかと思います。まああの方は何か文章を書かとか、そういうことを言わ<sup>(14)</sup>れている程度では衆の中に出ることができない程度で、やはり男の人をすることが、時間において劣つて、少しの時間をさいて世の中に出で行く程度ですから、廻りの人が、それに志したということを認められないから、そ<sup>(15)</sup>れと同時に、それにつきまつてまで時間というものを求めなかつたと思うのです。それで結婚をするときに、お互に話合つて結婚するか、或いは結婚しないかというようなことで、随分家庭生活というものを考えさせられたと思う。ただ初めからそれはそれで、女人の人も気持が変るか知れませんけれども、それはそのとき考えて、一番妥当な条件を決めればよいので、そういう人は、やはり結婚する前にそういう志を持つていて、結婚すると<sup>(16)</sup>きに勉強するとかという氣があれば、それはやはりどうして行けばよいかということを真剣に考えている。それを飾り物として考えるならば、それは家庭生活の中で楽しめる範囲内

です。女人の人だつて、やはり飾り物とい<sup>(17)</sup>うような態度で考えているのじやないと思いますから、それに必要な時間<sup>(18)</sup>与えなければならないと思います。さつき清小納言のとき<sup>(19)</sup>、装飾品といふようなことをおつしやいましたけれども、そのときのことは、私はよく存じ<sup>(20)</sup>ませんけれども、装飾品というような気持で、書くことはしないでしようけれども……。

**平林** あの装飾品というものは、小林さんとのあのときに、結局、大貴族に比べると、道真も女流作家も装飾品であったと、■大貴<sup>(21)</sup>族はもつとおうらかな生活の中についた。そういうのが一流で、併し、今までの仕事<sup>(22)</sup>がらすれば、一流の仕事といふものは殆んど残つてなくて、装飾家といふものが残つている。

**折口** その装飾家つていうのは意味が面白<sup>(23)</sup>いのだろう。しげ子さんの意味でない。大貴族の生活は、普通の生活から言えば生活できるのだけれども、日本の伝統から言うと、それができないといふようなのです。そういうもので言うたのでしょうか。あなたの『<sup>(24)</sup>』言うておられる、そういう女の装飾とか、そんな意味でない。

**由起** 昔のやはり宫廷文学とか、ああいう意味での装飾という意味でしようか。

**折口** もつと深い意味がありましよう。つまり日本の昔の平安朝時代<sup>(25)</sup>の清少納言に関する話は当該原稿内に記載無し。  
一 清少納言に関する話は当該原稿内に記載無し。  
二 「平林」を鉛筆と黒ペンで二重に取り消し、鉛筆で由起の発言の後に後続の文章を続けることを指示する修正線あり。  
三 小林に関する話は当該原稿内に記載無し。

は宗教的な、つまり家には（坐子、婦女がいなければならない。）大きな家の主人は皆婦（巫）女です。だから天子の皇后という者は結婚しないのが原則だったのです。結婚しないわけにいかないから、『皆よ

そにお客にやるという形で結婚させられた。そんなふうに貴族の身辺についている女房及び女達も、やはり一つの坐子として家庭におつたのです。段々それが長い間に別の意味を生じて来て、文学や歌を作ったり、それから手紙を書いたり、音楽をしたりするようなふうになつて来ました。併し、それを直接の目的に段々になつて来るけれども、今度はそういう名目的な、婦女性的な旦那の許可されないと、貴族の家庭という関係でできない』<sup>(15)</sup>といふ、そういう意味でしよう。

**白田** 明治の末年でござります不。青踏社ができましたのは……、平塚秋子さんですか……、あの時にあの人気が女性は「二字空白」<sup>(16)</sup>『ジジ』、女性は太陽であつたと。ああいう高揚精神という<sup>(17)</sup>ものは、これは今の女性の運動といふものの中に足らないのじやないかと思うのですが、終戦後、婦人代議士という者が出て、随分沢山出て来たけれども、段々減じて、今の婦人の精神といふものは、何か低迷しているよう<sup>(18)</sup>に思ひますけれども不。

**平林** 政黨の運動<sup>(19)</sup>は非常<sup>(20)</sup>で、切札<sup>(21)</sup>も書かず、切札<sup>(22)</sup>も書かず、繩<sup>(23)</sup>がなく本<sup>(24)</sup>わざの<sup>(25)</sup>。それは<sup>(26)</sup>やまゆみ<sup>(27)</sup>の一種の海外情網<sup>(28)</sup>が本<sup>(29)</sup>わざの<sup>(30)</sup>。その言葉が示している<sup>(31)</sup>女性は太陽であつた<sup>(32)</sup>あるが、それを決め<sup>(33)</sup>ました。これが市川房江さん<sup>(34)</sup>といふ言葉に持つてゐるの<sup>(35)</sup>けれども、その中で市川房江さんは、全然変つた性格を

史本あります。それがや、その開放女性の彼等の仰と書いますか、始めに情

解 平塚さんの頃の風俗・習慣・制度への抵抗は、主として感情的

緒的抵抗だったのですけれども、今度は實質的本『社会制度への批判からはじまつたプログラムをもつもの』ものに變つて、今その道程を示しているのです。『』<sup>(36)</sup>され<sup>(37)</sup>、『この頃の運動ははなぐしい感情的』抵抗<sup>(38)</sup>本著はなくなつて『るます』<sup>(39)</sup>『け』れども、併し、進んだという点では、やはり『現今の方がずっと進んでゐるし、感情も高いものだ』進<sup>(40)</sup>だと思うのです。本來、今『平塚さんのあの頃はまだ』男と女と『は』平等であるべきものだという、<sup>(41)</sup>試練が人の心に定着する<sup>(42)</sup>が弱かつたので、<sup>(43)</sup>投げ<sup>(44)</sup>る程でありまして、そつとうことを、声高らかに叫んでも、<sup>(45)</sup>それが時『代』の制度になることはあり得ない『』<sup>(46)</sup>ゆで、それが平塚内<sup>(47)</sup>容は勢い高踏<sup>(48)</sup>なりました。時代<sup>(49)</sup>がわたりました。日本は非常に遅れているのです。後<sup>(50)</sup>『その

後は、男女平等の思想に清新味はなくなり思想運動といふより』実質的な事務見たいな運動ですから、今『の』婦人運動<sup>(51)</sup>を定着するということはないのでござります。で<sup>(52)</sup>も、私、まあ婦人運動とは一諸にはならない『ことな』のですけれども、与謝野晶子さんといふ『一人の』人を考えて見ます。あとの人の『女性感情解放』の歌が、非常に命が短か<sup>(53)</sup>た<sup>(54)</sup>ということについては、随分考えさせられ本ものがあると思います。其の後<sup>(55)</sup>本<sup>(56)</sup>つせず謝野さんの全集も本の<sup>(57)</sup>です。かゆみ<sup>(58)</sup>。「二字空白」<sup>(59)</sup>が本<sup>(60)</sup>のところ本<sup>(61)</sup>の一面で<sup>(62)</sup>。あとの歌が我々の心に傳わ<sup>(63)</sup>きるのは、我々本<sup>(64)</sup>に稀に與せ、そう言つちやなんですけれども、まあ『明星』<sup>(65)</sup>ものが全集は本<sup>(66)</sup>す。かゆみ<sup>(67)</sup>やあるの<sup>(68)</sup>すけれども、仕方ないと思ふんです。仕方ないと思ふんです。

【明月】とさかみのが命が短やたと謝罪せんの命が短やたとせん  
やまなまは、随分考れさせやれやせ思ひ。又我々の命が永いせんやせ思ひ  
考れさせやれも思ひ。』

一五

折口 夫の鉄窓とフランスに行つて来て、行つてゐるうちから駄目に  
なつて、帰つて来では生涯駄目でした。ただ達者に作つてあるだけで、

どの歌見ても拙い歌ばかりでした。ただあの人は始終競争しておつたの  
ですネ。』<sup>(17)</sup> 鉄窓は生活に毀れて、それで晶子がその場合だけの今日にし  
たのですネ。併し、それで鉄窓負けてしまつて、それで晶子さんも伸び  
なかつたのですネ。だから晶子さんも存外短つたのです。』<sup>(18)</sup>

白田 折口先生も現近「二字空白」(右傍に「シヨウシユウ」)のような  
一つの変化を、やはり講義で示しておられるわけですが、或る意味で、

やはり人間としての掘下げというようなことが普段に行われ、最後まで  
行われる人にも、やはり歩みを止めた抒情詩<sup>(19)</sup>、そのものの運命である  
かも知れんけれども、或いはもう一つ、それをもつと抒情詩が人間を生  
み出しているのですから、人間の掘下げの範囲であつたか、どこまでも  
追求して行くかということでも、又考え直されるんで』<sup>(20)</sup>はないのでしょ  
うかネ。

平林 その追求といふものは、抒情詩ではないんですから不。詩なんと

いうものは求めたら生れて来るもので……。

白田 つまり歌や詩の中なしに、人間の』<sup>(21)</sup>生活の中です。そうす  
ると、もっとその点は長い生命が得られるのではないか。そうでないと  
結局従前の抒情文学だと……。

一五 176 ページは、用紙全体に黒ペンで斜線を引いて取り消し。

平林 それは幾分違います不。抒情詩といふものは、ああいうはかない  
ものだと私は考<sup>(22)</sup>えているのでござりますけれども、併し、それを苟く  
も一生の仕事とするならば、そういうものに頼らないで、もつと外のも  
のに頼らなくちやならんと私共の悲哀<sup>(23)</sup>〔哀〕<sup>(24)</sup>をもつて考へてゐるのでござ  
いますけれども不。』<sup>(25)</sup>

折口 抒情詩といふものは「四字空白」(強さが加わら)なければ駄目  
なので、どこまでも下らないように強を加えて行くことはできま  
せんから、やはり駄目になる。それは「あらぎ」見たいに生じている  
と、平凡な話だけれども、材料二<sup>(26)</sup>つも尽きないから不。材料尽きない  
限り、その持つ見方はちゃんと変つて行くから不。ともかく歌は女の時  
代が又一遍来ると思う。

白田 小説の方では、明治のときには、女性文壇は、どうも非公式  
…………。<sup>(27)</sup>

平林 女性が怒るでございましょうネ。

白田 ああいうふうな女性文壇、女子を送り出す、そういうものは初め  
はございませんけれども、婦人文庫<sup>(28)</sup>といふようなものが出来たけれども、  
あれを随分新らしい性格を持つて』<sup>(29)</sup>いるように思います不。今はああい  
うものは出ませんし不……。そういう一種の文芸を保護するというか、  
そういう特殊な保護者が出て来るということも、それが非常は學問的な

平林 たゞ明治時代の場合は、女の出口といふものが塞がれておりまし  
一七 「悲衰」の右傍に「?」とあり、その上から鉛筆で取り消し線を引く。

たから、意味が<sup>なか</sup>あつたかれ知れません。今では出口は塞がれておりません。それで余り出来ないとい<sup>(18)</sup>うのですから、非常に事情が違うのです。

**折口** 併し、それを出させる批評家が悪いのでしょう。批評家が卑<sup>女</sup>のことは悪<sup>口</sup>書くけれども、あれは批評家がポーズを調えているのでしょうか。ともかく眞面目な人でも男のも<sup>(18)</sup>のなら悪く書くけれども、とにかく認めていると。女人には頭から軽蔑してかかっているのが、女人の人を出せない理由……。

**平林** そうでござります。女人を非常に軽蔑しております。<sup>(19)</sup>

**折口** だから軽蔑しにくいものだと……、とにかくあの態度を批評家がやめて呉れなければ、女の文学は非常に不幸だと思います。

**由起** 又考え始めれば、そういうことも計算の上で生きて行かなければ、到底生きて行<sup>(19)</sup>けないでしよう。男の方でもそうでしようけれども、女だつたら余計そうじゃないでしようか。併し、批評を気にして

おつてはしようがないと思います。それも一つの条件だと思います。<sup>(19)</sup>

**折口** 併し、批評のことも何だけれども、ともかくよい批評でも、悪い

批評でも問題になるものは、ジャーナリストが問題にするのだから、

ジャーナリストから悪<sup>口</sup>を言われても生きて行けるわけです。基準として立つて<sup>(19)</sup>いるわけだけれども、その批評家の言うことに対しても、ジャーナリストがこれに着いて行けばよいということになる不。やはり作家は考えなければならんと思う。併し、それよりは作家は、やはり成

金的に育つて行くとい<sup>(19)</sup>うことが必要だと思う。成金時代に自重ということは考えもつまらんから、仕事において、女性作家は成金時代、その

成金時代には何を貢つてもよいのだけれども、時代の強さによって押し出されている。だから女が萎靡して<sup>(19)</sup>いる時代は駄目なんです。だから或いはそんな意味で我々が求めるでなしに、大いに我々をおだてて呉れる力があれば、我々も生きれるでしよう不。

**平林** 確かにそういうところがありましょ<sup>(19)</sup>う不。

**折口** 桃山時代とか元禄時代という性格を見ると、こんな時代にいろいろな作家が出ていたのだが、明治時代には作家が萎靡沈滯して出て来ないので<sup>(19)</sup>す。

**白田** まあ結局そうなると、国の運命全体です不。若しくはやはり一種のルネッサンス化というか、日本全体が、特にこうして戦いに敗れてしまつたというのですから不。併しながら、やはり起ち上る力というものを、どう<sup>(19)</sup>うしても使わないというと駄目だということになるのじやないでしようか不。

**由起** 何か木に実がなつてゐるようでござります不。

**平林** そのままあるといふ時代には、どう<sup>(19)</sup>も果樹が育たないようです不。

**折口** 我々はそういうふうに空想しますけれども…………。

**白田** 明治の初めでも、皇后様が津田さんだの何だの五人も、非常に若い人を留学生に<sup>(20)</sup>送り出して、日本の婦人のために尽せということをおつしやられた。そういうことが、やはり御皇室で作るとか、何とかといふことでなしに、みんなでできてよいのではないか。文芸院のようなものも畢竟<sup>（官僚）</sup>で作つたらおしま<sup>(21)</sup>いで、民間で…………。フランスの文芸院といふものは、そういうのじやないのでしょうか。

由起 私よく存じません。

白田 民間でもつと出て来るとよいと 思います。官吏によつて支配されでは、大きな夢<sup>(22)</sup>が伸せない。やはりもつと国民全体の中から出て来るようになつたのです不。

平林 やはり日本でも、明治以後<sup>(23)</sup>政府の援助<sup>(24)</sup>が出てからも繁栄したのです。やド この前の社会党の内閣の時に、片山さんが一万円文<sup>(25)</sup>芸家協会に出すから、誰か受賞者を選衡しろというようなことを言つておつたのですね。このインフレ時代に……。（笑声）「一字空白」全くケチな時代なんですよ。

白田 どうも淋しい話になつたのですけれ<sup>(26)</sup>ども、まあこれは……。

平林 まあ私は文芸が発達しない時代は悪い時代と、そう<sup>(27)</sup>も言えないと思うのです。兼徹時代<sup>(28)</sup>には文芸というものに力を裂かねば<sup>(29)</sup>、嚴<sup>(30)</sup>す伸びよ<sup>(31)</sup>といふ意味<sup>(32)</sup>がある。『できないこと』もあると<sup>(33)</sup>思うのです。その社会の事情等<sup>(34)</sup>で文芸<sup>(35)</sup>があれ<sup>(36)</sup>な<sup>(37)</sup>のやうかや、小柳ゆゑ立亭<sup>(38)</sup>が伸びないから、悪い時代とは簡単に言えない。そうじやないでしようか。

白田 まあそういう希望を持つて、我々勉<sup>(26)</sup>強して行きたいと思つております。尚皆さん折口先生に何かお尋ねすることはありますか。

平林 何を伺つてよいか分らないのですから……。（笑声）

白田 それでは、この辺で……。どうも有難うございました。

〔以下空白〕<sup>(29)</sup>